

怪談「受け取り」

ボクは宅配のバイトをしている。
あの、猫のマークで有名なところだ。
そのせいではないだろうけど、不可思議な体験をすることが多い。
この話は、その中のひとつ。

いつものように、ボクは配達する届け物を仕分けしていた。
普通免許は持ってるけど、バイトのボクは車を使えない。
だから、緑のボックスをのつけた手押しの台車が、ボク専用の配達車。
でも緑のボックスは、大きいようで、すぐにいっぱいになってしまう。
だから台車に積む前に、配達順番を考えて、仕分けをする必要があるんだ。
そうしないと効率よく配達できないし、荷崩れしてしまうこともある。
料理でいえば、仕込みみたいなものかな？
この作業は地味だけど、とても重要なんだ。
だから、ひとつひとつを手にとり、しっかりと住所を確認する。

そうして仕分けの作業をしていて、ボクは軽めの箱を手にとると、
「おばあちゃんトコか」
と、何の気なしに呟いた。
“おばあちゃん”といっても、親戚とかそういうのじゃない。
単なる“お馴染みさん”。
このバイトをやっていると、担当地域に“お馴染みさん”というのができてくるんだ。
よく行くお客さんや、印象の強いお客さん。
あまり行きたくないお客さんもいるけど...この届け先のおばあちゃんは逆。

おばあちゃんはいつも、届け物を受け取ると、配達票に自分の名前を書くんだ。
人柄を忍ばせる、丁寧で、綺麗な字。
大抵のお年寄りには判子を使うのに、このおばあちゃんは使わない。
ちょっと珍しい人。
そして届け物が完了すると、

「いつも、ありがとね」
と、おばあちゃんはニッコリ笑ってくれる。

「ありがとうございました」
と、ボクも頭を下げて応える。
何気ないことだけど、この仕事で一番うれしい時だね。
おばあちゃんは、人当たりがよくて、いつもニコニコと労をねぎらってくれるし。
暑い夏の日には、冷たい飲み物。寒い冬には、みかんをくれたりもする。
お線香の匂いがするところは、ボクに亡くなった祖母を思い出させ、懐かしく和ませてくれる。

だから配達に行くのは、いつも楽しみだったりするんだ。
配達票を見て、ポツと呟いたのも、そんな理由からだね。

台車を押して、おばあちゃんの家に着くと、ボクは低い柵を開けて小さな庭に入った。

いい忘れてたけど、印象に残ってるのは、もうひとつ理由があるんだ。
ここの家は、東京では珍しく、庭にお墓がある家なんだ。
っていても、気味がわるいと思ったことは一度もない。
配達に行くのは、決まって昼間だからね。
夜中なら別かもしれないけど。
明るい昼日中じゃ、「へえ～」と思うくらいかな？
いまでもそう。
特に気にすることなく、お墓の前を通過して玄関にたどり着いた。
呼び出しベルはないので、茶色い木の柱を、コンコンと二回ノック。
返事を待ちながら、ボクはあたりを見回した。
小さな庭は、お墓のせいで、あまりスペースはない。
猫の額のような花壇に、真っ赤な彼岸花が咲いていた。
家の中から返事はなく、ボクはまた、コンコンと四回目になるノックをした。
それで、しばらく待っていたけど、返事はなかった。
いつもはこのくらいで、気づいてくれるんだけど...お留守なのかな？
そう思っていたら...

と。中から笛のような音が、かすかに聞こえた。
独り暮らしのお年寄りの家には、なんとも似つかわしくない音。
聞き間違いかな？
...ピュー.....ピュー.....
踵を返したボクに、また笛の音が呼びかけた。
あれ？ いるのかな？
ボクは首を捻った。
お孫さんでも遊びに来てるのだろうか？
お孫さんが笛を吹いてて、それでノックが聞こえないのかな？
そんなことを思いながら、ボクはコンコンと六回目のノックをした。

「.....はあ...いい...」
今度は嘎れた、小さな返事が聞こえた。
「こんにちは～。 運輸です～」
ボクは、玄関越しに声をかけた。
するとさっきの笛の音にまじり、嘎れた声が聞こえる。
「...いま.....でらんないの...ピュー...ごめんね.....」
風邪でもひいたのかな？
ツラそうな声だ。
「そうですか。
お届け物なんですけど、どうしましょうか？
後でまたきましましょうか？」
「...そこ...に.....ピュー...置いといて...くれる...？」
「そこ...？」
「...お墓のトコ...ピュー.....後で...取りに行く...から.....」
そういうのは“玄関前配達”といって、厳禁なんだけど。
お客さんの要望なのだから、断るすべはない。
なにより病気のお年寄りを、無理に呼び出すのも気が引ける。

「わかりました～」

ボクは了解の返事をする、お墓のところに届け物を置いて、携帯電話の時計を見た。
こういうときは、配達票に日付と時間を書き記すんだ。
なにか問題が起きたり、配達センターで聞かれたりしたときの覚え書きみたいなものだね。

「...ごめんね.....」

おばあちゃんの声が聞こえた途端、なぜか背筋がゾクゾクして身がこわばった。
いつものように、やさしい声なのに...

「い、いえ。あ、ありがとうございました...あ...」

ボクは慌てて立ち上がると頭を下げ、なにかに急かされるように立ち去った。

次の日の朝。

ボクは目が覚めると、いつものようにTVをつけた。
バイトに出る前に、天気予報を見るのが日課になってるんだ。
しかし画面に映ったのは、美人のお天気お姉さんでも、天気図でもなかった。
それはなんとも、寝覚めのわるいニュース。
ひとり暮らしの老人が惨殺されたという、凄惨な事件だった。

「治安がわるくなったな...ホントに.....」

そう呟くと同時に、ボクはギョッとした。
被害者は、あの、おばあちゃんだったのだ。
いっぺんに目が覚めると、TV画面に釘付けになった。
どうやら事件は、昨日、玄関の土間の辺りで起こったらしい。
可哀相に...。喉笛を掻き切られて、そのまま放置されたとか.....。
.....喉笛を切られて...放置？
ボクは昨日のことを思い出していた。
あの苦しそうな声...
ピュー、という笛の音...
そ、それじゃ、ボクは、今にも死にそうなおばあちゃんと、あんな会話をしていたんだろうか
.....？

扉一枚の近さで、苦しんでいる人を助けずに、あんな能天気な会話を...。
知らなかったとはいえ、それはとても残酷で、なんともやりきれない...

「よ、よかった...」

詳細を聞きながら、ボクは不謹慎ながらも、ホッと胸を撫で下ろした。
死亡推定時刻が、配達的时间と重なってなかったからだ。
その時刻は、ボクが伺った、二時間前.....。

悲鳴を上げるとボクは、布団を被ってガタガタと震えた。
誰だってそうなるだろ？！

だってニュースが正しければ、“ボクが伺った二時間前”に、おばあちゃんは亡くなっていたことになるんだ。

つまりボクは、すでに死んでいる人と、会話してたんだ.....。

その日、ボクはバイトを遅刻した。
あんなことが起きて、ホントはバイトどころじゃないんだけど...。そうもいかない。
陰鬱な気をようやく引きずり起すと、ノロノロとした足どりで、ボクは配送センターに現れ

た、

そしてボクを待っていたのは、センター長のものすごい叱責だった。

遅刻のことじゃない。

届け物がひとつ、行方不明になっていたんだ。

どうやら持ち出されたままで、配達完了にも、不在扱いで戻ってもいないのがあるらしい。

ボクはすぐにピンっときた。

おばあちゃんへの届け物だ。

昨日ボクは、慌ててあの場を立ち去った。

そのせいで配達票を抜き忘れ、配送センターでは行方不明ということになってしまったんだろう。

ボクは事情を説明すると、すぐにおばあちゃんの家へ向かった。

正直、ボクの足どりは、軽くはない。

昨日、ボクの背筋を凍らせた原因も、いまとなってはわかるから。

しばらく近寄りたくはなかったけど...届け物は、大事な預かり物。

それが行方不明では、会社の信用に関わるもの。

いくらバイトだからって、バイトにはバイトなりのプライドがある。

それに配達票を持ち帰るくらいなら...そう、コワイこともないだろう...。

おばあちゃんの家は、昨日きた時と、なんら変哲はなかった。

てっきり、黄色いテープとか巻かれてると思ったんだけど...。

現場検証とか、終わったせいなのかな？

一応、場を荒らさないように、ボクは注意深く柵を抜けると、お墓の前にきた。

でもそこには、届け物の姿はなかった。

そのかわり、小石をのせた配達票があった。

誰が届け物を持っていったんだろう...。

配達票を拾いあげて見ると、そこには名前が書いてあった。

人柄を忍ばせる、丁寧な字...。

まちがいなく、おばあちゃんの手で、こう書き添えてあった。

「ありがとね」

ボクは帽子を脱いで手を合わせると、お墓に深く頭を下げた。

「ありがとうございました」

< FIN >